

# 日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

## 四糸金吾殿御返事

ふかしやくしよりよう こと

## （不可惜所領の事）

新版  
1582  
〜  
1584

しじようきんぐどのごへんじ ぶかしやくしよりよう こと  
四条金吾殿御返事（不可惜所領の事）

けんじ ねん がつ さい しじようきんぐ  
建治3年（'77）7月 56歳 四条金吾

い つきにじゆうごにち おんふみ どうげつ にじゆうしちにち とりのとき きた  
去ぬる月二十五日の御文、同月の二十七日の酉時に来つ  
そうろう おお くだ じよう きしよう書 由 ごと

て 候。仰せ下さるる状と、また起請かくまじきよしの御  
誓 状 みそうら うどんげ 咲 見 しやく

せいじようとを見候えば、優曇華のさきたるをみるか、赤  
せんだん 双 葉 得 珍 香

梅檀のふたばになるをえたるか。めずらし、こうばし。

さんみようろくつう えたも うえ ほけきよう しよじ しよじゆう 登  
三 明 六 通 を 得 給 う 上、法華経にて初地・初住にのぼら  
たま しょうか だいあらかん とくむしようにん ぼさつ しやりほつ

せ給える証果の大阿羅漢、得無生忍の菩薩なりし舍利弗・  
もくれん かしようとう しゃばせかい まつぼう ほけきよう ぐつう

目連・迦葉等だにも、娑婆世界の末法に法華経を弘通せん

だいなん 堪

叶

よし

じたいそうら

ことの大難こらえかねければ、かなうまじき由、辞退候い

さんわくみだん

まつだい

ぼんぷ

きよう

き。まして、三惑未断の末代の凡夫、いかでか、この経の

ぎようじや

にちれんいちにん

じようもく

がりやく

あつく

おうなん

行者となるべき。たとい日蓮一人は杖木・瓦礫・悪口・王難

忍

さいし

たい

むち

ぞく

をもしのぶとも、妻子を帯せる無智の俗なんどは、いかで

かな

なかなかしん

良

末

通

か叶うべき。「中々信ぜざらんはよかりなん。すえとおらず、

暫

ひと

笑

ふびん

思

そうら

しばしならば、人にわらわれなん」と不便におもい候いし

たびたび

なん

にかど

ごかんき

こころ

たも

に、度々の難、二箇度の御勘氣に心ざしをあらわし給うだ

ふしぎ

脅

にしよ

しよりよう

捨

にも不思議なるに、かくおどさるるに、二所の所領をすて

ほけきよう

しん

通

ごきしようそうろう

て法華經を信じとおすべしと御起請候こと、いかにとも

もう

申すばかりなし。

ふげん

もんじゅとう

まつだい

ほとけおぼ

普賢・文殊等なお末代はいかんがと仏思しめして、

みようほうれんげきよう

ごじ

じゅせんがい

じゅしゅ

じようぎようとう

しにん

妙法蓮華經の五字をば地涌千界の上首・上行等の四人に

おお

付

そうら

こと

こころ

あん

にちれん

こそ仰せつけられて候え。ただ、事の心を案ずるに、日蓮

どう

助

じようぎようぼさつ

きへん

おんみ

い

替

が道をたすけんと、上行菩薩、貴辺の御身に入りかわら

たま

きようしゅしやくそん

おんはか

せ給えるか。また教主釈尊の御計らいか。

か

みうち

ひとびと

りようかん

りゆうぞう

はか

彼の御内の人々うちはびこつて、良観・竜象が計らい

定

きしよう

書

たま

にてやじようあるらん。起請をかかせ給いなば、いよいよ

彼奴

原

傲

方

々

触

もう

かまくら

うち

にちれん

かつばらおごりてかたがたにふれ申さば、鎌倉の内に日蓮

でしとういちにん

責

失

が弟子等一人もなくせめうしないなん。

ぼんぷ

習

み

うえ

計

凡夫のならい、身の上ははからいがたし。これをよくよ

知

けんじん

しょうにん

もう

とお

置

くしるを賢人・聖人とは申すなり。遠きをばしばらくおか

たま

ちか

むさし

守

どの

りようしよ

捨

にゆうどう

せ給え。近きは武蔵のこう殿、両所をすてて入道になり、

けつく

おお

しよりよう

なんによ

公

達

ご

前

とう

結句は多くの所領・男女のきゆうだち・御ぜん等をすてて

ごとんせい

うけたまわ

殿

こ無

頼

きようだい

御遁世と承る。とのは子なし、たのもしき兄弟なし。

にしよ

しよりよう

わずかの二所の所領なり。

いっしょう

夢

うえ

あす

期

こつじき

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなる

ほけきよう

瑕

たも

おな

とも、法華経にきずをつけ給うべからず。されば、同じく

歎

気色

じょう

書

はなげきたるけしきなくて、この状にかきたるがごとく、

諂

ふ

ま

おお

なかなか

すこしもへつらわず振る舞い仰せあるべし。中々へつらう

悪

ならば、あしかりなん。

しよりよう

召

お

い

たも

じゅうらせつによ

たとい所領をめされ追い出だし給うとも、十羅刹女の

おんはか

深

侍

たも

にちれん

御計らいにてぞあるらんとふかくたのませ給うべし。日蓮

鎌

倉

あ

は、ながされずしてかまくらにだにもありしかば、有りし

戦

いちじようう

ころ

みうち

悪

いくさに一定打ち殺されなん。これもまた、御内にてはあ

しやかぶつ

おんはか

しかりぬべければ、釈迦仏の御計らいにてやあるらん。

ちんじよう

もう

そうち

そう

そうち

陳状は申して候えども、またそれに僧は候えども、あ

覺 東

さんみぼう

遣

そうろう

まりのおぼつかなさしょうろに三位房をつかわすべく候に、いま

しょうろ

そうら

そうら

おな

ごぼう

だ所勞きらきらしく候わず候えば、同じことにこの御房

参

そうろう

大

学

さぶろうどの

滝

たろうどの

をまいらせ候。だいがくの三郎殿か、たきの太郎殿か、

富 木 どの

暇

したが

書

上

たも

とき殿かに、いとまに随ってかかせてあげさせ給うべし。

上

こと切

甚

急

ないない 内

これはあげなば事きれなん。いとういそがずとも、内々うち

認

他

彼 奴 原

騒

をしたため、またほかのかつばらにもあまねくさわがせて

差 出

ふみ 鎌

倉 うち

披 露

さしいだしたらば、もしやこの文かまくら内にもひろうし、

かみ

進

禍

さいわ

上へもまいることもあるらん。わざわいの幸いはこれな

ほけきよう

おんこと

いぜん

もう

古

しょうじ

り。法華經の御事は已前に申しふりぬ。しかれども、小事こ

ぜん

起

そうら

だいじ

かなら

おお

そ善よりはおこつて候え。大事になりぬれば、必ず大い

騒

おお

さいわ

ちんじよう

ひと

なるさわぎが大いなる幸いとなるなり。この陳状、人ご

見

かれ

恥

顚

とにみるならば、彼らがはじあらわるべし。

「ひとくち

もう

たま

われ

みうち

い

しよりよう

上

ただ一口に申し給え。「我とは御内を出でて所領をあぐ

かみ

召

出

ほけきよう

おんふせ

さいわ

べからず。上よりめされいださんは、法華經の御布施、幸

おも

罰

たま

ぶぎようにん

いと思うべし」とののしらせ給え。かえすがえす奉行人に

諂

気色

しよりよう

かみ

た

へつらうけしきなかれ。「この所領は上より給びたるには

だいじ

ごしよろう

ほけきよう

くすり

助

あらず。大事の御所労を法華經の薬をもつてたすけまいら

た

そうらうしよりよう

め

ごしよろう

せて給びて候所領なれば、召すならば御所労こそまた

返 そろう とき よりもと ご 怠 状 そろう

かえり候わんずれ。その時は、頼基に御たいじよう候と

もち そろう そろう 打 当 憎 相 氣

も、用いまいらせ候まじく候」と、うちあてにくぞうげ

帰

にてかえるべし。

おん 寄 合 夜

あなかしこ、あなかしこ、御よりあいあるべからず。よる

ようじん よめぐ とのばら 語 もち つね 寄

は用心きびしく、夜廻りの殿原かたらいて用い、常にはより

合 こんど みうち 出 じうつ く

あわるべし。今度、御内をだにもいだされずば、十に九は

うち 者 狙 汚 死

内のものねらいなん。かまえて、きたなきしにすべからず。

けん じさんねんひのとうししちがつ にちれん かおう

建治三年丁丑七月 日蓮 花押

しじようきん ごどのごへんじ

四条金吾殿御返事